

第三回特別展

アイヌ文化にみる

# 獵と漁

北海道立北方民族博物館  
Hokkaido Museum of Northern Peoples

北海道網走市子潮見  
03-3156-15-8888

平成四年二月八日(土)から三月十五日(日)

九時三十分から十六時三十分まで

休館日 月曜日 二月十一日(祝)

小学生、中学生

高中生、大学生  
小学生、中学生

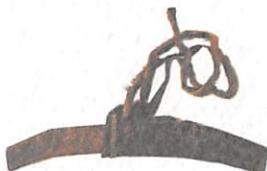
八〇円(五〇円)  
三〇円

100

アイヌ民族は北海道をはじめサハリン、千島にくらし、漁獵や採集によって生活していました。今回の特別展では、とくに北海道アイヌの生業活動のなかの狩猟と漁撈について、さまざまな民族資料や考古資料、アイヌ風俗絵などをとおして紹介します。

開催に当たって、つぎの機関にご協力いただきました。

網走市立郷土博物館、小清水町教育委員会、財団法人アイヌ民族博物館、財団法人北海道理藏文化財センター、市立函館博物館、函館市北方民族資料・石川啄木資料館（五十音順）



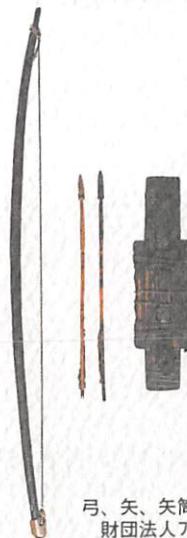
小刀  
財団法人アイヌ民族博物館蔵



アイヌの人々にとっては、おもに初冬から春先にかけてが山猟の季節で、シカやクマのほかキツネ、タヌキ、ウサギといった小動物を追った。銃が普及する明治期以前は、手持ちの弓や仕掛け弓、あるいは罠が狩猟具の主力であった。

沿岸では、北方の海に棲み、北海道の近海に季節的に現れるオットセイ、アザラシや回遊しているクジラなどを捕らえていた人々もいた。板縫り舟で沖に出て、キテとよばれる鉛で獲物をしとめた。

捕った獲物は食糧ばかりではなく、角や骨は生活に必要な様々な道具の素材として、また皮などは衣類としてばかりではなく、交易品として重要な位置を占めていた。



弓、矢、矢筒  
財団法人アイヌ民族博物館蔵



アイヌ熊狩の図(平沢屏山) 市立函館博物館蔵



鉛先  
財団法人アイヌ民族博物館蔵  
市立函館博物館蔵



初夏から初冬にかけて、産卵期に川をのぼってくるサケ・マスは、シカとともに北海道にくらすアイヌの人々の重要な食糧源だった。川岸や川の中に台を設けて、そこから鉤鉛やヤスで突いたり、鉤で引っ掛けたり、川を木柵でせき止めたりして捕った。来たるべき冬に備えて、干したり燻製にしたりして貯えられた。

太平洋沿岸の沖では、メカジキ、マンボウといった大型魚類の捕獲が行われ、海獣と同じように、鉛が使われた。



鉤鉛  
財団法人アイヌ民族博物館蔵